

西光寺だより 第一八六号 令和八年二月一日発行

二月が始まりました。

昨年の除夜の鐘の時など、後半はだいぶ暖かい日もありましたが、一月後半からぐっと寒くなり体調管理の大切さを感じることでした。毎年この時期の受験生には体調管理はもちろん、雨や雪など自然との向き合いも考えながらの日々であります。なぜこの寒い時期にいつも思うことではあります……。

さて、いつものお除夜のお参りに高槻までうかがつた際に見つけた川、如是川。

よくよく思いますが、仏説阿弥陀経のお勧めに出でてくるお言葉の『如是我聞』の如是を思い、調べてみると、

大阪府高槻市北部を流れる、芥川の支流であり、淀川の一次支流。別綴には如是川とある。これは明治にできた新しい表記法で、

旧来の表記法たる「女瀬川」の「女瀬（によせ）」と同じ音である仏教用語の如是我聞の「如是」をとつたものである。

やはり仏教用語からきているようであります。

高槻には如是小学校や中学校などがあり、通るたびにふと思うことでありました。「如是我聞」のお言葉に改めて触れながら、本願寺新報の記事を載せていただきます。

私たちは日ごろ、お寺やご法事でお経を聞くご縁をいたいでいますが、「お経は亡くなつた人のために読まれるものだ」と思つておられる方が、案外多いのではないかでしょうか。

「お経は死んだ人のためのもの」というと、何か呪文のように聞こえてしまいますが、でも、本当にそうでしようか。

皆さんも「存じの、あの「一休さん」こと一休宗純（そうじゅん）禅師に、こんなお話が伝わっています。

ある家のお葬式に、一休さんが呼ばれました。亡くなつた方のために立派なお経を読んでいただきこうと、ご家族は心待ちにしていたのです。ところが、「一休さんはお焼香を済ませると、なんと、さつさと帰つてしまわれた」というのです。

これには家族もびっくり。「なぜお経を読んでくださいないのでか」と尋ねると、こう答えられたと伝えられています。

「お経は死んだ人にあげるもんじやない。お経は、今、生きて迷つている人間が聞くものだ」

いかがでしようか。アニメの「とんちの一休さん」のイメージとは違う、なんとも痛快で、真実を突いたお話ではないでしようか。

一休さんは、室町時代に生きた禪僧ですが、当時の形式にとらわれた仏教界や、形骸化した権威を嫌いました。

「眞の仏の教えは、生きている私たち一人ひとりに向けられるべきだ」と問いかけ、世間の常識を打ち破る「破戒僧」「風狂の僧」と呼ばれる生き方をあえて貫かれました。

そんな権威嫌いの一休さんにとつて、お経が、その真実の教えを抜きにして、形式的な呪文のように扱われることは、受け入れられなかつたのでしよう。

本当に大切なことは、お経という「眞実の言葉」であり、それを聞いた人間が、自分の生き方を見つめ直すことだったのです。

私たちの浄土真宗は大切な方が亡くなられたとき、阿弥陀さまの本願力によつて、すぐにお淨土に往き生まれ、仏となられるといふ教えです。

すでに仏さまにならでいるわけですから、私たちが、たとえば「善根（ぜんごん）を積む」といった特別な修行や行いによつて、その方を

救い導く必要はないのです。

では、一体誰のために、お経は読み、聞かれるのでしょうか。

それはまさしく「生き迷っている人間」のためです。つまり、「今」「ここ」にいる「私」のために、お経はあるのです。

お経のはじめのところを見てみると、どの經典も基本的に「如是我聞」という四つの漢字からはじまっています。

これは「こ」のように、私は仏さまのみ教えを聞かせていただきました」という、お弟子さんたちの素直な告白であり、み教えを受け止める姿勢を示しています。

お経は、お釈迦さまが説かれたみ教えを聞いたお弟子さんが、「ああ、そうだったのか」「私のために説いてくださったのだ

と、人生の真実として深くうなずき、心に刻んだ「聞法の喜び」の記録なのです。

ですから、「如是我聞」という言葉には、

「私は、自分の物差しや知識、経験といつた先入観をすべて、仏さまのお言葉を、そのまま素直に聞かせていただきます」

という、聞く側の謙虚な姿勢が込められているのです。

もし、お経が亡くなつた人に向けて読まれる呪文のようなものであつたなら、私たちの心には何も響かず、全く意味のわからないものになるでしょう。

それでは、仏さまの説かれたみ教えは、私たちを救い、わが命の事実に目覚めさせる「法」として響いてこないでしよう。

私たち人間は誰もが悩み苦しみを抱え、自分の力ではどうにもならない「迷いの世界」を生きています。自分の思い通りにならない現実の中、「なぜ生きるのか」「死んだらどこへ行くのか」という根源的な問いを抱えながら、もがき続けているのが、私たちの本当の姿ではないでしょうか。

お経は、そんな迷いのただ中にいる私たちに、阿弥陀さまの「必ず

救う」というあたたかい願いがかけられていることを知らせてくださいます。

阿弥陀さまの願いは、私たち一人ひとりを迷いの世界からお淨土へと導き、仏としてくださる大いなるお慈悲の心です。

お経は今を生きる「私」の人生を照らし、わが命の事実に目覚めさせてくださる「真実の言葉」であり、親鸞聖人がお示しくださった阿弥陀さまの本願念佛のみ教えこそ、私たちを救う真実のみ教えです。そして、亡くなられた方が、私たちに仏さまのみ教えを聴聞するご縁を与えてくださつたと心得て、そのご縁を大切に歩ませていただくことが、阿弥陀さまの願いのかなう生き方となるのではないですか。

合掌



浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一-一七一二
電話 ○七二一六二二一四七九四
FAX ○七二一六二一一九二九一
<http://www.osaka-saikouji.net/>